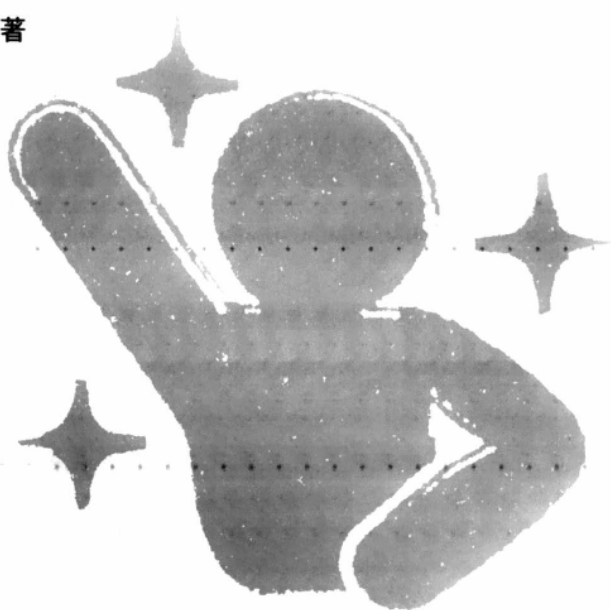


教え方を改善する

















教え方を改善する

国際交流基金 著



国際交流基金

-  第1巻 「日本語教師の役割／コースデザイン」
-  第2巻 「音声を教える」 [CD-ROM付]
-  第3巻 「文字・語彙を教える」
-  第4巻 「文法を教える」
-  第5巻 「聞くことを教える」 [CD付]
-  第6巻 「話すことを教える」
-  第7巻 「読むことを教える」
-  第8巻 「書くことを教える」
-  第9巻 「初級を教える」
-  第10巻 「中・上級を教える」
-  第11巻 「日本事情・日本文化を教える」
-  第12巻 「学習を評価する」
-  第13巻 「教え方を改善する」
-  第14巻 「教材開発」

■はじめに

国際交流基金日本語国際センター（以下「センター」）では1989年の開設以来、海外の日本語教師のためにさまざまな研修を行ってきました。1992年には、その研修用教材として『外国人教師のための日本語教授法』を作成し、主に「海外日本語教師長期研修」の教授法の授業で使用してきました。しかし、時代の流れとともに、各国の日本語教育の状況が変化し、一方、日本語教授法に関する研究も発展したため、センターの研修の形や内容もさまざまに変化してきました。

そこで、現在センターの研修で行われている教授法授業の内容を新たにまとめ直し、今後の研修に役立て、また広く国内外の日本語教育関係のみならずにも利用していただけるように、この教授法シリーズを出版することにしました。この教材の主な対象は、海外で日本語教育を行っている日本語を母語としない日本語教師ですが、広くそのほかの日本語教育関係者や、改めて日本語教授法を独りで学習する方々にも役立てていただけるものと考えます。また、現在教師をしている方々を対象としていますが、日本語教育経験の浅い先生からベテランの先生まで、できるだけ多くのみなさまに利用していただけるよう工夫しました。

■この教授法シリーズの目的

このシリーズでは、日本語を教えるための必要な基礎的知識を紹介するだけでなく、実際の教室で、その知識がどう生かせるのかを考えてもらうことを目的としています。

国際交流基金日本語国際センターでは、教師の基本的な姿勢として、特に次の能力を育てることを目的として研修を行ってきました。その方針はこのシリーズの中でも基本的な考え方となっています。

1) 自分で考える力を養う

理論や知識を受身的に身につけるのではなく、自分で考え、理解して吸収する力を身につけることを目的とします。

2) 客観性、柔軟性を養う

自分のこれまでの方法、考え方にとらわれず、ほかの教師の意見や方法を知り、客観的に理解し、時には柔軟に受け入れることのできる教師を育てることをめざします。

3) 現実を見つめる視点を養う

つねに現状や与えられた環境、自分の特性や能力を客観的に正確に把握し、自分の現
場にあった適切な方法を見つける姿勢を育てることをめざします。

4) 将来的にも自ら成長できる姿勢を養う

研修終了後もつねに自分自身で課題を見つけ、成長しつづける自己研修型の教師を育
てることをめざします。

■この教授法シリーズの構成

このシリーズは、テーマごとに独立した巻になっています。どの巻からでも学習を始
めることができます。各巻のテーマと概要は以下の通りです。

- | | | | |
|------|------------------|---|---|
| 第1巻 | 日本語教師の役割／コースデザイン | } | 日本語を教えるうえでの全体的な
問題をとりあげます。 |
| 第2巻 | 音声を教える | | |
| 第3巻 | 文字・語彙を教える | } | 各項目に関する基礎的な知識の整理をし、
具体的な教え方について考えます。 |
| 第4巻 | 文法を教える | | |
| 第5巻 | 聞くことを教える | | |
| 第6巻 | 話すことを教える | | |
| 第7巻 | 読むことを教える | | |
| 第8巻 | 書くことを教える | | |
| 第9巻 | 初級を教える | } | 各レベルの教え方について、総合的に考えます。 |
| 第10巻 | 中・上級を教える | | |
| 第11巻 | 日本事情・日本文化を教える | | |
| 第12巻 | 学習を評価する | | |
| 第13巻 | 教え方を改善する | | |
| 第14巻 | 教材開発 | | |

■この巻の目的

かん もくてき

この巻では、「**教え方の改善**」を次のように考えます。

・今の教え方よりも効果的な教え方を考えて、それを**実践する**（＝実際に教える）こと

そのために、この巻では教師が自分の教え方をふり返って、問題や課題を解決するための新しい方法を取り入れ、その効果を**確認**することをすすめています。そして、教え方を改善するために必要なのは、(1) 日本語教育や学習理論など、関連する分野の新しい知識や技能を身につけることと、(2) 自分の教え方をふり返ることの2つであると考えています（図1 p.2 参照）。

この巻では、(2) の自分の教え方をふり返ることに焦点をあて、そのために、以下の方法を紹介しています。

- ① 自分の教え方と学習者の学び方に目を向ける（第1章～第3章）
- ② 地域や社会の中での学習者や日本語教育の役割を考える（第1章、第4章）
- ③ 日本語教師としての自分のこれまでとこれからを考える（第1章、第4章）

さらにこの巻では、自分の教え方のふり返りを出発点にして、教え方の改善を自主的に、ほかの人と協力しながら、継続的に行っていくことが教師としての成長につながると考えます（図5 p.79 参照）。

■この巻の構成

かん こうせい

1. 全体の構成

ぜんたい こうせい

本書の構成は、以下のようになっています。

1. 「教え方を改善する」とは？

教え方の改善の対象は、教える内容や技能、レベルに関するもの、学習者への対応などさまざまです。また、社会の変化や教師自身の経験が増えることによっても、新しい改善の必要性が見えてきます。そして、自分の教え方の何をどう改善するか考える前に、自分がどのような教師かを見つめます。

2. 教え方をふり返る

教え方を改善する前に、自分がどのような教え方をしているのかをふり返ります。1人で、または学習者やほかの教師の意見を聞いてふり返る5つの方法を紹介します。また、ふだん教えている授業の構成を確認することを通して教え方をふり返ります。

3. 教え方を改善するための活動

教え方をふり返って発見した課題や問題改善のために、形態の違う活動を4つ紹介します。読者がそれぞれの活動を理解しやすいように、活動の実例と質問を通して考えます。

4. 改善を広い視野でとらえる

教え方の改善のヒントを得るために、教室の外にも目を向けます。また、教師としての今までをふり返り、これから将来何をしたいか、どんな教師になりたいかを考えてみます。

2. 各章の課題（【質問】と《課題》）

この巻の中の【質問】と《課題》は、次のような内容に分かれています。



ふり返りましょう

自分自身の体験や教え方をふり返る



考えましょう

この巻で紹介した考え方や方法などの実例についての質問に答える



やってみましょう

教え方をふり返るための活動や改善のための活動を実際にやってみる



整理しよう

せいり

それまで学んできたことを整理してもう一度考える

せいり いちど

この巻で紹介している事例は、筆者らが海外で教えるノンネイティブ日本語教師を対象とした研修を通して得たさまざまな情報や経験をもとに作ったものです。しかし、海外だけでなく日本国内で教える教師にとっても、またノンネイティブ教師だけでなくネイティブ教師にとっても、自分の授業や教え方を振り返るための参考になるものだと思います。

この本を初めて出版したときから、社会環境が変わり、日本語教育の対象・内容・方法も広がり、変化してきました。その変化に合わせて、(1)、(2)の点に注意すると、みなさんそれぞれの日本語教育の現場に生かしていくことができます。

(1) この本では、インターネットやソーシャル・メディアを利用した方法にはあまり触れていませんが、例えば2 (1) ③ (p.22～25)で紹介した学習者アンケートはウェブ・アンケートで手軽に行えるようになっています。また、3-4の教師の研修会もインターネットを利用して行うことも多くなりました。このようにメディアが変わっても、この本で示した考え方や方法を生かすことができます。

(2) この本で扱う初級の授業例では、第9巻『初級を教える』で示した文型学習を重視した教え方を取り上げています。例えば、次の部分です。

・2-1 (2) p.34～ C先生の例

・2-2 (1) p.38～ P先生が行った文型学習重視の50分の授業

この本では取り上げていませんが、文法学習重視以外の、例えば課題遂行の力を高めるCan-do目標の授業や、文化の学習、異文化理解能力を育成する授業設計もあります。

せつけい

